蛙

芥川龍之介

自分の今寝ころんでゐる側に、古い池があつて、そこに蛙が沢山ゐる。

池のまはりには、一面に芦や蒲が茂つてゐる。その芦や蒲の向うには、背の高い白楊の並木が、品よく風に戦いでゐる。その又向うには、静な夏の空があつて、そこには何時も細い、硝子のかけのやうな雲が光つてゐる。さうしてそれらが皆、実際よりも遥に美しく、池の水に映つてゐる。

蛙はその池の中で、永い一日を飽きず、ころろ、かららと鳴きくらしてゐる。ちよいと聞くと、それが唯、、、、、、ころろ、かららとしか聞えない。が、実は盛に議論を

闘(たたかは)してゐるのである。蛙(かへる)が口をきくのは、何もイソップの時代ばかりと限つてゐる訳ではない。
中でも芦の葉の上にゐる蛙は、大学教授のやうな態度でこんなことを云つた。
「水は何(なん)の為にあるか。我々蛙の泳ぐ為にあるのである。虫は何の為にゐるか。我々蛙の食ふ為にゐるのである。」
「ヒヤア、ヒヤア」と、池中の蛙が声をかけた。空と艸木(くさき)との映(うつ)つた池の水面が、殆(ほとんど)埋(うま)る位な蛙だから、賛成の声も勿論(もちろん)大したものである。丁度(ちやうど)その時、白楊(はこやなぎ)の根元に眠つてゐた蛇(へび)は、このやかましいころろ、

からら（傍点）の声で眼をさました。さうして、鎌首（かまくび）をもたげながら、池の方（はう）へ眼をやつて、まだ眠むさうに舌なめづりをした。

「土は何の為にあるか。艸木（くさき）を生やす為にあるのである。では、艸木は何の為にあるか。我々蛙に影を与へる為にあるのである。従つて、全大地は我々蛙の為にあるのではないか。」

「ヒヤア、ヒヤア。」

蛇は、二度目の賛成の声を聞くと、急に体を鞭（むち）のやうにぴんとさせた。それから、そろそろ芦の中へ這（は）ひこみながら、黒い眼をかがやかせて、注意深く池の中

の様子(ようす)を窺(うかが)つた。

芦の葉の上の蛙は、依然として、大きな口をあけながら、辯じてゐる。

「空は何の為にあるか。太陽を懸(か)ける為にあるのである。太陽は何の為にあるか。我々蛙の背中を乾かす為にあるのである。従つて、全大空(たいくう)は我々蛙の為にあるのではないか。既(すで)に水も艸木(くさき)も、虫も土も空も太陽も、皆我々蛙の為にある。森羅万象(しんらばんしやう)が悉(ことごと)く我々の為にあると云ふ事実は、最早(もはや)何等(なんら)の疑(うたがひ)をも容(い)れる余地がない。自分はこの事実を諸君の前に闡明(せんめい)すると共に、併せて全宇宙を我々の為に創造した神に、心からな感謝

を捧げたいと思ふ。神の御名（みな）は讃（ほ）むべきかなである。」
蛙は、空を仰いで、眼玉を一つぐるりとまはして、それから又、大きな口をあいて云つた。
「神の御名（みな）は讃（ほ）むべきかな……」
さう云ふ語（ことば）がまだ完（をは）らない中に、蛇の頭がぶつけるやうにのびたかと思ふと、この雄辯なる蛙は、見る間（ま）にその口に啣（くは）へられた。
「**からら**、大変だ。」
「**ころろ**、大変だ。」
「大変だ、**からら**、**ころろ**。」
池中の蛙が驚いてわめいてる中（うち）に、蛇は蛙を啣（くは）へた

儘、芦の中へかくれてしまつた。後の騒ぎは、恐らくこの池の開闢以来未嘗なかつた事であらう。自分にはその中で、年の若い蛙が、泣き声を出しながら、かう云つてゐるのが聞えた。

「水も艸木も、虫も土も、空も太陽も、みんな我々蛙の為にある。では、蛇はどうしたのだ。蛇も我々の為にあるのか。」

「さうだ。蛇も我々蛙の為にある。蛇が食はなかつたら、蛙はふえるのに相違ない。ふえれば、池が、――世界が必狭くなる。だから、蛇が我々蛙を食ひに来るのである。食はれた蛙は、多数の幸福の為に捧げら

れた犠牲だと思ふがいい。さうだ。蛇も我々蛙の為にある。世界にありとあらゆる物は、悉蛙の為にあるのだ。神の御名は讃む可きかな。」

これが、自分の聞いた、年よりらしい蛙の答である。

（大正六年九月）

底本：「筑摩全集類聚　芥川龍之介全集第四巻」筑摩書房
　　１９７１（昭和46）年６月５日初版第１刷発行
　　１９７９（昭和54）年４月10日初版第11刷発行
入力：土屋隆
校正：松永正敏
２００７年６月26日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。